

INTERVIEW

オレゴン健康科学大学家庭医療学講座 助教
地域医療振興協会寄附講座担当

山下大輔先生



JADECOM-OHSU 交流事業から世界へ発信

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

家庭医になりたくて米国へ

山田隆司(聞き手) 今日はオレゴン健康科学大学(OHSU)家庭医療学の山下大輔先生をお迎えしています。

先生には以前にもインタビューに登場していただいたことがあります。今回は、昨秋開設したJADECOM-OHSU寄附講座の責任者として先生をお迎えしたという経緯がありますので、そのことも含め、改めてお話を伺いたと思います。先生との出会いは随分前の旧家庭医療学会の頃でしたね。先生は当時から家庭医に興味を持たれていて、その後渡米し、OHSUの研修医としてスタートされたわけですが。

山下大輔 私は父の仕事の関係で4歳までサイパンに住んでいたのですが、そこで家族ぐるみで付き合いをするようになった医師の方がいたので

すね。当時サイパンはへき地でしたので、米国版の海外協力隊のようなところから派遣されていた先生で、その先生が私にとって「医師」のイメージでした。

ところが信州大学医学部へ行って「あれ？なんだか違うなあ」と思いました。そう感じながら1,2年生を過ごし、3年生の後半になって、いよいよ実習も始まって、それでもまだ自分の進路を迷っていた時に、第2内科にHIVと緩和医療の専門医という米国人の先生が客員教授として赴任されたのです。その先生はエバリー先生といいますが、家庭医で、カリフォルニアの北のサンタローザというところから来た方で、HIVと緩和ケア医になった理由は、80年代にカリフォルニアで家庭医をしていたらHIVが大流

行していたときだったのでHIVの治療と緩和ケアをしなければならなかったのですね。エバリー先生は普段は第2内科で緩和ケアやHIVの診療の指導をされていたのですが、小さなゼミを別に設けて、米国の家庭医の話をレクチャーしてくださいました。

私は夏休みになると米国にボランティアに行っていたのですが、帰りにエバリー先生の病院に寄りました。そこはサンタローザの150床もない小さな病院でしたが、エバリー先生は研修プログラムの指導医でもありましたので、外来や病棟を見学させてもらいました。驚きました。そこでは研修医がいきいきと指導医とディスカッションしながらしっかりとやっているのですね。自分も日本で医療研修を始めていましたが、全く雰囲気が違う。何よりも「大学病院ではないのにこんなに優秀なんだ」という思いがありました。

後になって、米国の研修医に応募しようと思って研修プログラムを調べたところ、サンタローザの家庭医プログラムは、実は1969年に米国に家庭医療の研修ができた最初の13のプログラムで今でも非常に人気のあるプログラムだったということを知りました。でもよく考えてみると当然なのです。家庭医は地域医ですから、良いプログラムというのは地域病院にあるわけです。

そういうところを見学できたのは自分にとって幸運ではあったのですが、やはり日本では家庭医の先生と出会う機会がなく、子どもを診るのが好きだったので、小児科医になろうかなあと考えながら卒業しました。

卒業して、初期研修が終わったら米国に臨床研修に行きたいと思っていたところ、2003年に友人の大橋博樹先生(現 多摩ファミリークリニック)に誘われて、家庭医療学会の夏期セミナーに参加したのですね。「日本にもこんなに家庭医がいるのか」と知ったのと、何より衝撃を受

けたのは、樋戸健次郎先生が参加されていて「米国で69年に家庭医ができたときに、The New England Journal of Medicineの記事を見て『自分はこれになる』と思って、5年間、外科、産婦人科、内科を研修し、その後北海道へ行っていわゆる欧米型家庭医療を実践した」というお話を聞いたことです。そういう出会いもあって、やはり「家庭医になろう」と思いました。同期にも恵まれましたし、当時、山田先生が家庭医療学会の会長をされていたので、久瀬診療所にも見学に行きました。その頃は北海道以外では、中部地方で家庭医療が盛んだったように思い「家庭医行脚」と称して見学して歩きました。

山田 研修中にですか？

山下 初期研修が終わって1年間、聖マリアンナ医科大学病院の総合内科に行き、その後です。当時は日本で家庭医のプログラムができるかできないかという時でしたね。2005年には藤沼康樹先生の生協浮間診療所に行きましたが、日本にはプログラムがないからやはり米国へ行こうと思って2006年にOHSUへ行きました。結局自分が行った年に日本でも家庭医療プログラムがスタートしましたが(笑)。

実は米国へ行って「あ、こんなもんなんだな」と感じました。もちろんOHSUはしっかりしたプログラムですが、私は医師6年目で米国に行きましたので、すでに日本でいろいろ研修させていただいていたわけなのです。今でもそう思っていますが、米国でそれほど目新しいことを勉強したという思いはありません。

山田 先生や大橋先生はじめ何人かの若い先生たちが中心になって、家庭医療学会の中に若手医師部会を作り、しっかりと家庭医を育成するプログラムを日本でも作らなくてはいけないと声をあげた。家庭医療学会のプログラム認定制度は先生たちの声がかきかけで始まったようなものです。